

Sky Seminar



「グローバルゼーション」の 経済学的な見方

国際線の機内での文章を目にした方が多くは、今まさに「グローバルゼーション」の恩恵を多少なりとも実感されていることでしょう。国外の自然・生活・文化に触れる喜びより大きな市場の存在によって生まれるビジネスや教育の機会、そのような経験が人生のかけがえのない部分を形成していると考えられている方も少なくないのではないかと思います。しかし、近年「グローバルゼーション」という言葉が多くの人々に不幸をもたらす元凶の一つとして語られるケースは少なくありません。そのせいか、例えば大多数のアメリカ国民は、鉄鋼製品や農産物の輸入に対して非常に高い関税を課することを支持

しています。確かに海外からの安価な物品が入ってくることでこれまで同じ品物を作っていた国内の生産者は競争の激化により利益を削られることとなります。しかし、経済学のテキストを開くと、商品の価格が安くなることにより消費者が全体として得る便益が、生産者の損失を必ず上回ると書いてあります。加えて海外の生産者の利益も増加させます。とはいえ、多くの人が国内の生産者の苦境に同情の念を抱くことなどから生じる、反グローバルゼーション的な世論をすぐに変えることは容易ではないでしょう。

経済学者もどんな形の「グローバルゼーション」でも必ず世の中全体の幸せに寄与するとは考えていません。「反グローバルゼーション」を唱える人々の主張の中には、途上国における環境問題に対する危惧があります。所有権が明確に規定されておらず、政治汚職の問題も深刻な国々では国際貿易の広がりが自国の環境を搾取する形で生産活動を促してしまつ可能性があることは確かです。けれども、その国の国内的な状況は変わらないうえ、途上国の環境を守ることを理由にその国を国際貿易から閉め出すことが、はたして得策と言えるのでしょうか。

一般に、世の中の変化について良い悪いの判断を求められた時、経済学者がまず口にする言葉は、場合によりけりで具体的に詳しく調べてみないとわからないというものです。こつこつと慎重さは時に不明瞭な印象を与えているのかもしれませんが、しかし論理的な推敲と現実の観察を繰り返すこととなく、そのような判断を下すことのできる場合は限られています。経済学的に考える際のヒントは、状況が変わることによって誰がどれだけ得をして、誰がどれだけ損をするかに注目することです。その際、社会は決してゼロサムではないといつことに注意してください。制度のあり方によっては誰かの得が必ずしも他の誰かの損につながってしまうわけではないのです。世の中の仕組みを上手に設計することによって社会の構成員すべてがより幸せになることに貢献したい多くの経済学者は願っています。

松枝 法道

関西学院大学
経済学部准教授

まつえだのりみち
専攻は環境経済学、応用ミクロ経済学。京都大学文学部卒、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校でPh.D(農業経済学)を取得し、2000年4月より関西学院大学経済学部にて任。近著に、「国際環境援助の動学分析：グリーン開発メカニズムの有効性」柴田章久氏・神学氏と共著、「清野三治・新保一成編著、地球環境保護への制度設計」(東京大学出版会、2007年)第7章など。

 **関西学院大学**
KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY

西宮上ヶ原キャンパス
〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1番155号
神学部 文学部 社会学部 法学部 経済学部 商学部 人間福祉学部 教育学部(2009年4月 西宮校地に開設予定)

神戸三田キャンパス(KSC)
〒669-1337 兵庫県三田市学園2丁目1番地
総合政策学部 理工学部